

4.4 地位指数の調査方法

1. 試験担当者

本場経営部経営第二科長 西沢正久 ほか
土じょう部土じょう第三研究室 共 同

2. 試験目的

数量化理論を用いて土じょう因子や環境因子から地位指数を推定する場合の地位指数は、固定標準地の資料を基にするが、簡単には暫定プロットかまたは樹幹解析による地位指数曲線を用いて外的基準として与えられるのが普通である。適合のよい地位指数曲線の選択土じょう型によるガイドカーブの形の相違、暫定プロットによる地位指数曲線と樹幹解析による地位指数との相違、各ポイントの地位指数と土じょう因子や環境因子との結びつき等の問題を究明して妥当な地位指数の決定を確立する。また森林の調査を土じょう調査および航空写真による測定と結びつけて総合調査として経営案に必要な情報が実用的に得られる方法を検討すること。

3. 昭和44年度の経過とえられた結果

1) 前橋営林局草津管内カラマツの128個のプロットによる地位指数曲線と樹幹解析木による地位指数曲線の比較を行なった。また、プロットごとの成長量を成長強度資料により計算した。円形プロット法とポイントサンプリング法の比較を70個のデータで行ない本数推定以外に両者に差がなく調査時間を考慮にいれるとポイントサンプリングがすぐれていることがわかった。

矩形プロット法とポイントサンプリング法との比較と共に「プロット法対プロットレス法」として林学会関東支部に発表、更に追加計算したものを「プロットサンプリング対ポイントサンプリング」として研究報告に発表予定。

2) 東京営林局水窪管内のスギ林分の調査は68点、35本の樹幹解析を行ない計112点、73本の樹幹解析を行なった。

この樹幹解析木による73本の資料で地域別に地位指数曲線を作成し、現在プロットによる地位指数曲線を作成中である。

4. 昭和45年度の試験計画

当初計画3ブロック×3令級×2樹高×3地位×3反復=162点 162-112=50点
不足のため水窪管において前年度同様の調査を行なう。